

麦の穂に 烏賊の雫や 市戻り 芭蕉の高弟(蕉門十哲の一人)野坡が享保2年(1717年)東古松町付近で作った句
<志太野坡(1662-1740)> 元禄15年冬、はじめて久留米にきて筑後に俳諧の種を蒔く。

2回目は享保元年(1716)長崎より諫早を経て海路若津あたりに上陸して久留米に。善導寺・吉井地方を経て「星野金山の
宰領」の弟子楚児を訪ねそこで年を越した。享保2年の新春、山を下り福島町の弟子(若林旦夕)の指導のため福島に来た
彼は、この句を作った。当時、現東古松町あたりは旧福島城下町の中心地で正月前後には市が立ち、近隣の庶民の買い物
客で賑わったという。郷土研究誌「筑後」第2巻第2号「筑後地方に於ける野坡」竹下泣猿著などより、本墓は大阪にあるが
田主丸町片ノ瀬虚空蔵さま境内に弟子たちが建てた墓がある

佐賀線の歴史

明治から昭和にかけ、若津港(現大川市)は筑後地方の重要な港として地域の産物や大川家具が海路、
日本各地へ運ばれていた。また、対岸の諸富港(現佐賀市)も重要な港として発展。しかしこの若津港と
諸富港の間には、九州一の大河、筑後川が横たわり、唯一の交通手段は渡し舟だけ。陸路、長崎・佐賀方
面と熊本方面を結ぶには鳥栖を経由するしかなかった。

1751年(宝暦元年)：若津港築く。